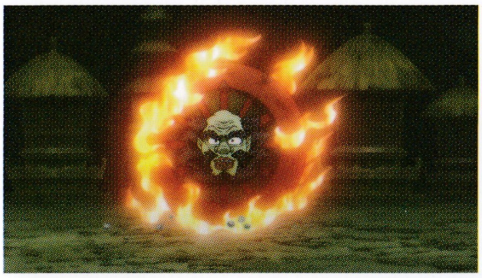
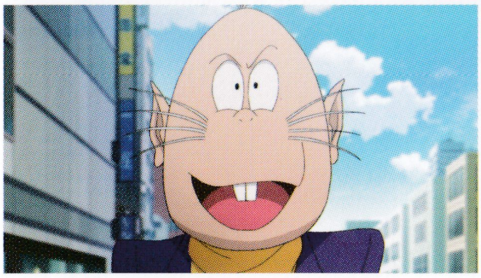


ゲゲゲの鬼太郎

2

DISC





第 13 話

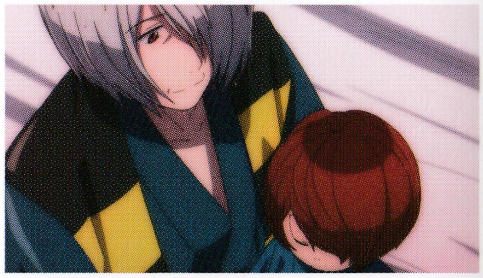
欲望の金剛石！輪入道の罠

ねずみ男が経営するダイヤモンドの店が大繁盛。実はねずみ男は裏で輪入道と手を組んでいた。輪入道は人間達の魂を食らい、魂を食われた人間達はダイヤモンドとなってしまう。ある時、何者かにねずみ男が連れ去られてしまい……!?

演出：竹下健一　脚本：野村祐一　作画監督：清山 滋崇　美術：今野慎一

第 14 話

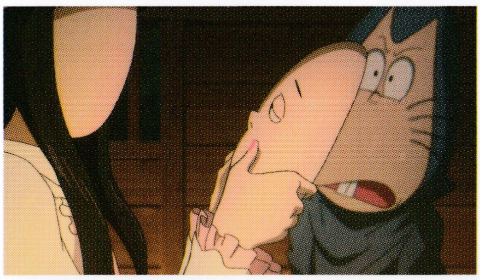
まくら返しと幻の夢





眠ったまま目覚めなくなった父親を心配する少年・マサシは、まなを通じて鬼太郎に助けを求める。目玉おやじの推測のもと、鬼太郎達はまくら返しのもとを訪ねたが、犯人ではなかった。まくら返しをうまくたきつけ、彼の術で夢の世界へ入り込むと……。

演出：古賀 豪　脚本：吉野弘幸　作画監督：太田晃博　美術：今野慎一





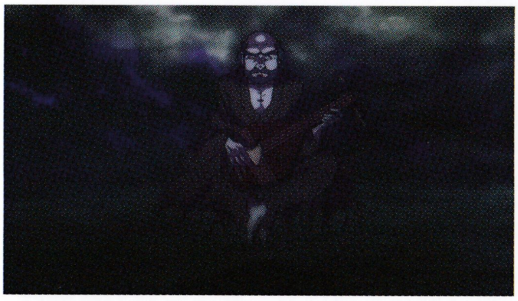
第 15 話

ずんべら霊形手術

美少女になりたいきららは自分の容姿を恨めしく思っていた。ある時不思議な老婆、妖怪・ずんべらに出会う。ずんべらは、自分の霊形手術を受けさえすれば望むままの美貌を手にすることができると持ちかけるが、それには大きな代償が必要で……。

演出：角銅博之　脚本：井上亜樹子　作画監督：小泉 昇　美術：今野慎一

第 16 話　潮の怪！海座頭



まなは親戚が住む境港を訪れていた。祭が開催されないと知り残念がるまなを元気づけるために、叔父は魚を獲ろうと漁へ出るが、そのまま戻ってはこなかった。船で捜索に出たまなは、沖で船幽霊達に襲われる。なんとその船幽霊達は……。

演出：岩井隆央　絵コンテ：小川孝治　脚本：野村祐一　作画監督：浅沼昭弘
美術：今野慎一

第 17 話　蟹坊主と古の謎

鳥取県境港の町。怪しい修行僧が現れて、謎かけをしては、答えられない人々を銅像に変えていく事件が密かに発生していた。鬼太郎ファミリーも次々と銅像にされてしまう。ついには鬼太郎までもが変わり果てた姿となってしまった！



演出：内山まな　絵コンテ：八島善孝　脚本：横谷昌宏　作画監督：八島善孝
美術：今野慎一

第 18 話　かわうそのウソ

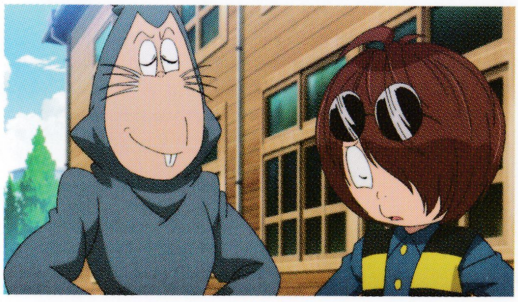


ねこ娘は誰も耕さなくなった畑を借りて野菜を育て、こっそり鬼太郎の家に届けていた。ある日、ねこ娘は道端で倒れていた少年に野菜を与える。一方、まなは別荘の近くに、ずる賢い妖怪が出るという噂を母親から聞かされて……!?

演出：門 由利子　脚本：井上亜樹子　作画監督：小松こずえ　美術：今野慎一

第 19 話　復活妖怪!? おばけの学校

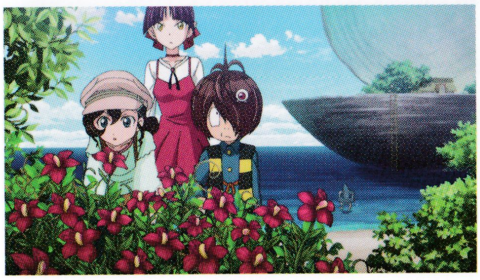
おばけの学校がある。そこには試験も何もない。三丁目の墓地で呪文を唱えると、ないはずの四丁目が現れておばけの学校に行けるらしい。そんな噂が流行る中、まなは裕太から、友達が「おばけになる」と言い姿を消したと相談されて……。



演出：飛田剛　絵コンテ：越智一裕　脚本：大野木 寛　作画監督：大西陽一
美術：今野慎一

DISC





第20話

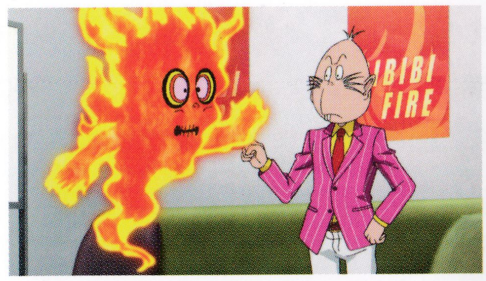
妖花の記憶

大叔母の淑子を見舞いに行ったまなは、家に花が咲いているか見てほしいと頼まれる。家に着くと庭だけでなく屋根や壁面にまで真っ赤な花が咲き誇っていた。これは妖花と呼ばれ、妖気や霊力を受けて咲くのだという。なぜ妖花が大叔母の家に咲くのだろうか……。

演出：三塚雅人　脚本：吉野弘幸　作画監督：信実節子　美術：今野慎一

第21話

炎上！
たくろう火の孤独

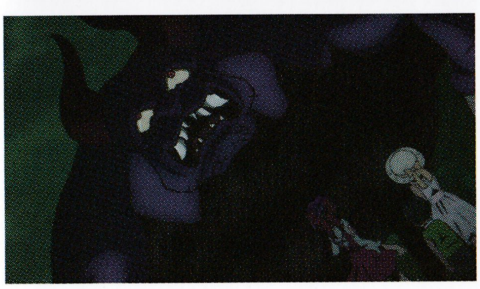




人や妖怪さえも避けて暮らしている、たくろう火という妖怪がいた。そんなたくろう火に、ねずみ男が近づき、人間たちのために働こうともちかける。孤独なたくろう火は感激し協力することになるのだが……。

演出：熨斗谷 充孝　絵コンテ：清島ゆう子　脚本：伊達さん
作画監督：小林ゆかり　美術：今野慎一





第22話

暴走!!
最恐妖怪牛鬼

古い言い伝えなど全く信じないタレントが牛鬼が封じられている岩を動かし封印を解いてしまう。突如、苦しみだしたタレントはみるみる牛鬼へと変異、町を破壊し暴れまくる。鬼太郎は見事に牛鬼を退治したように見えたのだが……!?

演出：古賀 豪　脚本：野村祐一　作画監督：藤原未来夫　美術：今野慎一

第 23 話 妖怪アパート秘話



1968年、ある所に新築アパートが建てられたが、そこに３体もの妖怪が棲みついてしまう。次々と逃げ出す住民たち。困ったオーナーは妖怪ポストに手紙を出すのだった……。時は現代に戻り、そこにはオーナーの孫である夏美がただ一人住んでいた。

演出：地岡公俊　脚本：金月龍之介　作画監督：市川吉幸　美術：今野慎一

第 24 話 ねずみ男失踪!? 石妖(せきよう)の罠

ゲゲゲの森に激震が走った。なんとねずみ男が結婚するというのだ。結婚式場を訪れる鬼太郎達。そこにはタキシード姿で上機嫌のねずみ男と、予想に反した美女である新婦・妖子の姿があった。しかし、結婚式以来ねずみ男の音信が途絶えてしまい……。



演出：牧野次郎　脚本：金月龍之介　作画監督：袴田裕二　美術：今野慎一

第 25 話 くびれ鬼の呪詛(じゅそ)

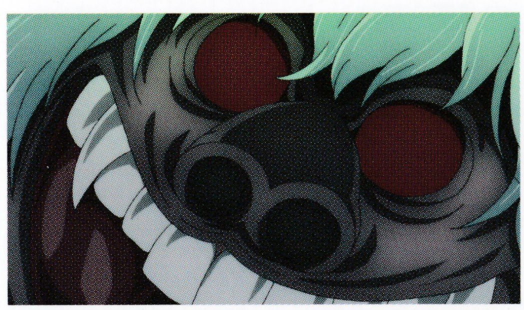


呪いのアプリをインストールし、同級生の名前を入力してしまったまな。呪った相手は軽傷を負い、彼女のスマートフォンには呪いのアプリから不気味な通知が届いていた。アプリは瞬く間に広まり、ついにまなのところにも呪いの知らせが届く。

演出：角銅博之　脚本：大野木 寛　作画監督：小泉 昇　美術：今野慎一

第 26 話 蠱惑(こわく)　麗しの画皮(がひ)

母親になじられて落ち込んでしまう高校生のゆうな。そこへ、子泣きじじいが通りすがり、巻物を落としていった。巻物には世にも美しい青年が描いてあり、ゆうながウットリと眺めていると、絵の中から青年が現実に抜け出してきた!!



演出：中村明博　絵コンテ：やしろ 駿　脚本：井上亜樹子
作画監督：清山 滋崇　美術：今野慎一

ゲゲゲのお喋り ❷



ねこ娘役
庄司宇芽香

×



犬山まな役
藤井ゆきよ

ねこ娘を演じる庄司宇芽香さん、犬山まなを演じる藤井ゆきよさんにご登場いただき、『ゲゲゲの鬼太郎』(第6期)のストーリーやキャラクターへの思い入れから、アフレコ現場の裏話まで語っていただきました。

「どうしよう……」と「嬉しかった!」

――第6期の『ゲゲゲの鬼太郎』に参加が決まった時のことをお聞かせください。

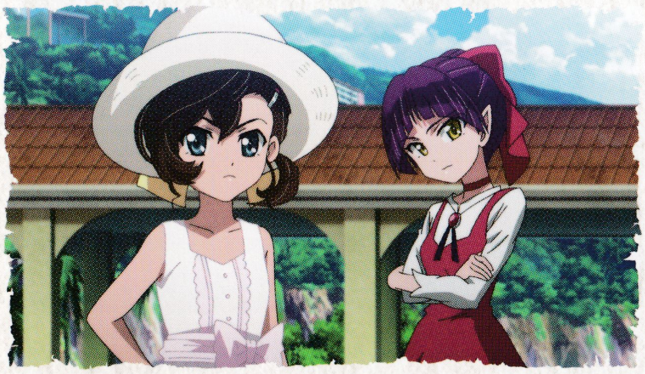
庄司宇芽香(以下庄):事務所から決まったと連絡を受けたときは本当に震えました。あの『ゲゲゲの鬼太郎』のオーディションに参加できた。それだけで感動していた私にとって、役をいただける、しかも誰もが知っている"ねこ娘"という大役。もちろん飛び上がりたい位の嬉しさはありましたが、同時に押し寄せた作品の大きさに足がすくみましたね。

藤井ゆきよ(以下藤):犬山まなはオリジナルキャラクターなので詳細が分からず、あまり出演しないのかと思っていたんですよ。でも『ゲゲゲの鬼太郎』が好きだったので、出演が決まった時は純粋に嬉しかったです!

アフレコ現場が声優界の宝石箱

――他のキャストの方の名前を聞いたときはどのようなお気持ちでしたか?

藤:出演が決まった時の純粋な喜びが衝撃に変わったのは、「目玉おやじ役は野沢雅子さんだよ」と聞いた時でした。実は私、新人時代にマコさん(野沢雅子さんの愛称)と共演する機会があったんです。その頃の私は何も出来ないド新人だったのですが、マコさんはとても優しく、根気強く指導してくださって……! だから、いつかマコさんとレギュラーで共演することが夢だったんです! その夢が『ゲゲゲの鬼太郎』で叶うことに感動して泣きました!! 後日、改めてキャスト一覧を見た時は、「この中に、私の名前が入っていいの!?」と思いましたね。



庄:世界を救ったり、地球を救ったり、宇宙を何回も救ってきた方々が、毎週ズラッと並んでいて……壮観ですよ。

藤:そうなんです、アフレコ現場が声優界の宝石箱なんです!

――そんなアフレコ現場は、どのような雰囲気ですか?

庄&藤:すっごく良い雰囲気……!

庄:大御所の方が多くて怖いのではと言われることがありますが、実際は、どこの現場よりも穏やかです。

藤:レジェンドのみなさまが、お芝居をしやすい空間と温かさを作ってくれるんです。休憩時間も非常に温かい時間ですよ。マコさんはいつも「お菓子食べる?」と勧めてくれて、(田中)真弓さん(砂かけばばあ役)と(山口)勝平さん(一反もめん役)は楽しいお話をしてくれます。(古川)登志夫さん(ねずみ男役)は、素敵なイラストを描いてくれるんです!

庄：台本に、とても素敵なねずみ男をよく描かれています。
藤：(島田)敏さん(子泣きじじい役・ぬりかべ役)はお芝居がずるくて(笑)。敏さんの後にしゃべる人は、笑わないという強い心を持っていないと耐えられない(笑)。
庄：毎回毎回テストでも本番でも変わらず全力で挑まれ、様々な角度から役を解釈してアプローチされている姿を見て、自分もこれで良いかなとか表現を限定して固めてはいけないのだと、毎回本当に勉強させていただいています。
藤：遊び心も豊富な方々なんです。テストで真弓さんに「ゆきよちゃんのセリフに被るところでアドリブを入れちゃうけど、びっくりしないで続けてね」と言われたことがあって……。
庄：あの時、そんなやり取りがあったのね(笑)！
藤：「来るぞ」と構えていても、耐えられない面白さでした(笑)。
庄：テスト用の録音も残して欲しい！
――スタッフの方についてはいかがでしょうか。
庄：皆さん本当にアツイ想いを持ってこの『鬼太郎』という作品に向き合っていらっしゃるのだと思います。ある時のご挨拶でプロデューサーの永富さんが男泣きをされて……。普段は理性的で泣かれたりするような印象の方ではないのに、スタッフキャストが一同に会した場で喋れなくなるほどの涙を見せられて。貰い泣きしてしまいました。作品に対して、尊敬とアツイ想いが溢れる素敵な現場です。
藤：みんな、『鬼太郎』が大好きなんです。

2人とも役の性格そのもの!?

――ねこ娘役、まな役を演じているときに気を付けていることはありますか？
庄：気を付けていること……。
藤：宇芽香さんは、ねこ姉さんそのものですよね。
庄：妖怪ってこと(笑)？
藤：そういう意味じゃないです(笑)！
庄：でも、ねこ娘は人間ではなく妖怪だということを常に念頭に置いています。ねこ娘初登場の第2話、まなと言い合うシーン。まなのエネルギーを受けてそのまま熱く返したんですが監督から「ねこ娘は熱くなりすぎずクールでいてください」という演出が入りまして。そこからは血の通った人間と一線を画するよう、あちら側とこちら側を意識して一呼吸おいて演じています。ゆきよちゃんこそ、まなそのものだよね。
藤：えっ!?　嬉しいですけど、同意するのは気が引ける(笑)。私は演出に関して、「あざとくしないで、裏表なく演じて欲しい」と言われたので、脚本の通り素直に演じているんです。私に似ていると言っていただけるのは、私がストレートに演じているからかも？　それと、まながねこ姉さんにあこがれている様子が、私が宇芽香さんに対して抱いている感情と同じなんです。現実とお芝居の差が無いので、ねこ娘役が宇芽香さんで良かったと思ってます！……本当にかっこいいんですよ、宇芽香さん。
庄：……ありがとう。
庄＆藤：(笑)。
――ねこ娘とまなの関係性についてはどのように思っていますか？
藤：まさかこういう展開になるとは思いませんでした。
庄：オリジナルキャラクターが可愛い女の子ときたら、ねこ娘と張り合って鬼太郎を取り合う展開になると思うよね？
藤：そう！　まなは、もっと鬼太郎に助けられる役なのかと思っていましたよ！　ふたを開けてみたら、いつもねこ姉さんに助けてもらっている気がします。
庄：まながピンチになると、一番最初に助けに行くのがねこ娘。鬼太郎は、その後ろで棒立ちだったこともあるしね(笑)。ねこ娘を信頼しているのはわかりますけど、任せすぎでしょう！
藤：まなも、何か起きた時に「鬼太郎に連絡しなきゃ！」ではなく、「ねこ姉さんに連絡しなきゃ！」と言いますから。



願いを込めた「妖花」と、迫真の演技の「牛鬼」。

――第6期の『ゲゲゲの鬼太郎』についての感想をお聞かせください。

藤：私は今回の『鬼太郎』もすごく好きです。ホラーの要素が強いですよね。ラストもハッピーエンドとは限らないし。鬼太郎が常に人間の味方をしてくれる訳ではなく、人間サイドに問いかけるお話が多いですし。

庄：「あなたはどうですか？」と言われているようで、ドキッとする。

藤：話が重くて、奥が深いんですよね。

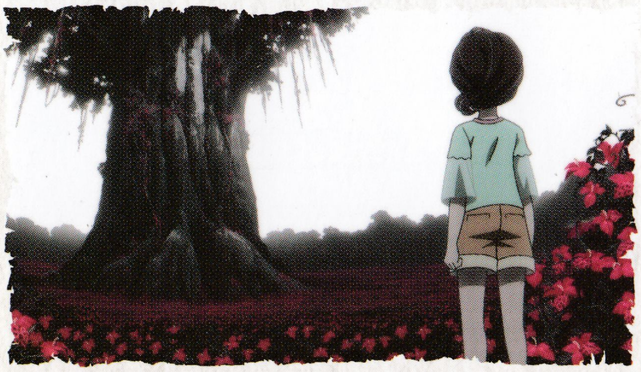
庄：あとはやはり、キャラクターが持つ力が大きいなと。現代においても古くなく、社会の闇や人間の業に触れても、"鬼太郎"を通すと、押しつけがましくなく、説教くさくならず受けることができる。水木しげる先生の偉大さを感じます。

――BOX2に収録されている中で、印象に残っている話はありますか？

藤：私は、第20話の「妖花の記憶」ですね、どうやって次の世代に戦争の悲惨さを受け継いでいくかというお話です。この話をやるにあたって、私自身も戦争を知らないことに改めて気づいたんです。なので父に連絡をして、戦争に行った祖父の話を聞いてみたり……と、勉強をするきっかけにもなりました。ラストでまなが自由研究を発表する場面は、願いを込めて読んだつもりです。

庄：この回に対するゆきよちゃんの想いはアフレコ中、凄く伝わってきました。

藤：水木しげる先生の「戦争はいかんです、腹が減るだけです」という言葉で表現されるような"戦争"を、子供たちに伝える大事なお話ですから。その中で、まなは"戦争を知らない若い世代"の代表として登場するので、責任重大だと思ったんです。思い入れと言えば……ねこ娘的には牛鬼（第22話「暴走!!最恐妖怪牛鬼」）ですか？



庄：うん、……牛鬼だね。アフレコの数週間前からスタッフの方に「牛鬼の回は、ねこ娘頑張ってください」と圧をかけられて（笑）。でも台本を頂いてその言葉に納得しました。画から感じる熱量も凄まじかったので、私も全力で答えなければいけないと思いました。

藤：ねこ娘の葛藤と切なさが宇芽香さんの演技に現れていて、見ていて泣きそうになりました！

庄：演じているときは本当に辛かったですね……。鬼太郎が本意ではなく人を傷つけている、止めなければいけない、私が戦わなければいけない、でも鬼太郎を傷つけたくない、という葛藤。私の演技が中途半端だったら、スタッフさんの作ってくれた画にも失礼なので、全力で演じました。

藤：いつも素敵ですけれど、牛鬼の回のねこ娘は特に素敵でした。

話の後味が強すぎる!?

―― 一番お気に入りの妖怪は誰ですか？

庄：私は、すねこすり。

藤：私もです！　すねこすりのお話は、今思い出しても涙が出る～！

庄：思わず、すねこすりの話を担当した演出さんに抗議しちゃいましたよ。「すねこすりの話、ひどすぎますよ！」と、誉め言葉として（笑）。

藤：第6期の『鬼太郎』をまだ見たことのない方にオススメしているお話は、第1話「妖怪が目覚めた日」、第2話「戦慄！見上げ入道」、第6話「厄運のすねこすり」、それと第7話「幽霊電車」なんです。

庄：その4つ、第6期の『鬼太郎』の色が分かりやすいかもね！

藤：それぞれのお話のふり幅を見てほしい。

庄：すねこすりと幽霊電車の回の落差が凄かったよね！

藤：どっちも、日曜の朝からとんでもないことをしてくれたと思いました（笑）。

庄：トラウマ回が2連続でしたからね。

藤：あと、ずんべらの回（第15話「ずんべら霊形手術」）も好きです。

庄：物議をかもしたよね。その人にとっての幸せな選択とは何か、考えさせられる回でした。私、ねこ娘のセリフは大抵すんなり入ってくるのですが、その回で唯一とても言いにくいセリフがあっ

たんです。それがきららちゃんに対して言った、「自分の顔で思いきり笑った方が、よっぽど幸せだと思うけど」というセリフです。これは、恵まれた容姿のねこ娘が言っても全く説得力がない！

藤：まなとねこ娘はかわいいから……。きららちゃんの抱える悩みは、この2人には分からないだろうと思いますよ。

庄：ずんべらの回みたいに、エンディングに乗り切れない話多いよね。

藤：後味が強すぎる話。だいたいいつもそうですけどね（笑）。

2人の妖怪ポストへの願い!?

――もしも妖怪ポストがあったら何をお願いしますか？

藤：何を言っているんだと思われるかもしれませんが……、私は不思議な体験に助けられることが多いんです。火事になりそうなところを、奇跡的に未然に防いだり。だからお願いしたいというよりは、「あのときはありがとうございました」という感謝状を入れたいです。

庄：そういう経験あるよね、私も賛成！　でも、お願いできるなら……カラスヘリコプターに乗ってみたい。

藤：確かに！

庄：私の中にある鬼太郎のイメージは、カラスと共に飛んでくる印象が強かったんです。ねこ娘が初めてカラスに乗った時も嬉しかった！　だから、私は「カラスヘリコプターに乗りたい」という願いを出します。私の方が「何を言ってるんだ」って感じになっちゃった（笑）。

藤：困ったことが無いのは良いことです！



――では最後に、BOX2を購入したみなさんにメッセージをお願いします。

庄：脚本や音楽、キャラクターの見せ方、動かし方、どの部分にも作り手の思いとパワーが込もった作品です。繰り返し観ることで、新しい発見があると思います。これを機に、何回でも観ていただきたいです。

藤：『ゲゲゲの鬼太郎』という作品は、子供、学生、大人と、年齢ごとに違う面白さを感じることができるんです。また、時代の移り変わりに関係なく、10年、20年後に見ても面白い作品だと思います。だから、歳を重ねるごとに違う受け取り方で楽しむことができるはず！ぜひ、こちらのBOXを大切に保管して、世代をまたいで観てください。





庄司宇芽香

神奈川県出身。青二プロダクション所属。
代表作は『デジモンユニバース　アプリモンスターズ』花嵐エリ役、『美少女戦士セーラームーン Crystal Season Ⅲ』シプリン役 プチロル役、『欅って書けない？』ナレーションなど。



藤井ゆきよ

神奈川県出身。青二プロダクション所属。
代表作は『ルパン三世』レベッカ・ロッセリーニ役、『美少女戦士セーラームーンCrystal』土萌ほたる：セーラーサターン役、『アイドルマスター ミリオンライブ！』所恵美役など。

永富×小川の ゲゲゲの部屋



プロデューサーの永富と、シリーズディレクターの小川がスタッフを招いて『ゲゲゲの鬼太郎』第6期を語り合う連載コーナー第2弾！今回のゲストは、キャラクターデザインに加え、総作画監督の清水空翔さんにご登場いただき、キャラクターデザインが決まるまでの制作秘話や、デザインのポイントなどを語っていただきました。


プロデューサー
永富大地

×


シリーズディレクター
小川孝治

×


キャラクターデザイン・総作画監督
清水空翔

抜群のデザインを爆速で提出

――清水さんがキャラクターデザインを担当することになった経緯をお聞かせください。

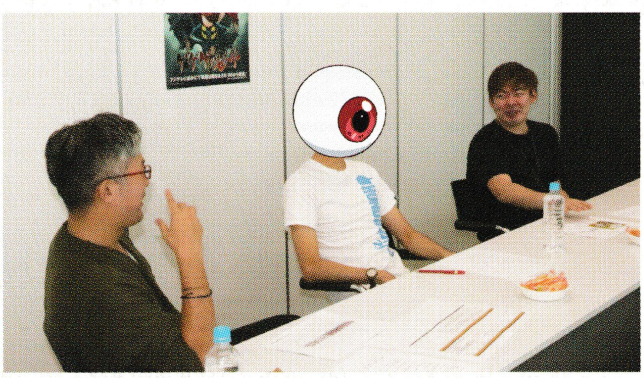
永富大地（以下永）：キャラクターデザインを決めるにあたって、アニメーターの方を数名お呼びしてキャラクターオーディションをしたんです。その中で抜群に良いキャラクターを作ってくれたのが清水さんでした。

――オーディションのイラストは、どのように描かれましたか？

清水空翔（以下清）：描く上での迷いは全くありませんでした。僕は右脳を働かせて動いている人間なので、感覚で仕事をしているんです。どんな精神状態でも絵は描けますが、自分の心が高ぶるようなものでないと良い絵にはならないですよね。だから「自分の絵で描いちゃえばいいや」と思いながら描きました。

永：僕や小川監督と清水さんのシンクロ率が高いので、すぐに線が引けていたんだと思うんです。

清：第6期の『ゲゲゲの鬼太郎』は、これまでの第5期までの『ゲゲゲの鬼太郎』の作風と大幅に変えて"スタイリッシュ"にするという話を最初に聞きました。そこで渡された資料には既に「ねこ娘を長身にする」という設定もあり、これはやってやろうと思いましたね。



永：オーディションの〆切は1か月程の猶予があったのに、清水さんだけ1週間以内で提出してくれたんですよ。

清：話を聞いてから、家に帰ってとりあえず描いたら、2、3時間くらいで終わっちゃったんです。

永：爆速でした。

清水さんのお仕事とは？

――そうして清水さんに決定した「キャラクターデザイン」というのは、具体的にはどこまで担当されているのですか。

永：メインのキャラクターデザインは全て清水さんの手によるものですが、各話に出てくるゲストの人間などは、各話の作画監督の方がやってます。

清：雪女（第39話登場）やずんべら（第15話登場）などの人型も含めて、妖怪は基本的にはすべて僕がデザインしています。

――小川監督から清水さんへの注文は何かありましたか。

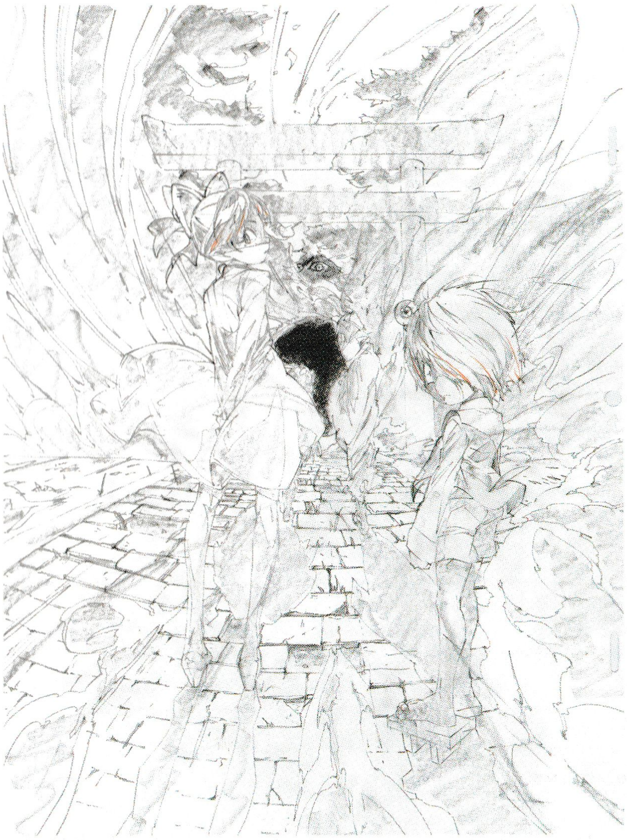
小川孝治（以下小）：特に何もしてないです。

永：そんなことないでしょう（笑）。

清：何かありましたっけ？　ノリでやってますよね。

小：注文というより、妖怪をどう見せたいかを伝えていますね。例えば雪女の回では、「鬼太郎と対決するベタな話ではなくて、コメディ要素と人間との恋愛要素がメインです」というストーリーとキャラクターの性格を伝えました。そしてそれをどう視聴者に伝えたいかというお話をして、デザインを起こしてもらっています。

清：僕はそれくらいの情報量の方がやりやすいです。



清水空翔 オーディション時イラスト

原作と第6期らしさのバランス

——デザインをするにあたり、水木しげる先生の原作の絵柄を意識されましたか。

清：第6期らしさとして、自分の絵柄を出していかなければならない部分もあり、その中で水木先生の絵も出していく。その2つは、自分のバランス感覚で保っています。「今回は自分の絵に寄せたキャラクターを作ったから、水木先生らしい妖怪も出そう」という感じですね。水木先生のデザインをそのまま描くのなら、原作や昔のアニメを見ればいいじゃないですか、わざわざ新しく作る必要ないですよね。

小：白山坊(第33話登場)は、清水さんの絵柄の比率が高いですよね。

清：あ～！　そうですね。

小：今期の白山坊の話の意図を汲んでいただいて名アレンジだと思いましたよ。

清：あとは、すねこすりもそうですね。原作を忠実に再現しても、今の時代ではキャッチーなキャラクターにはならない。だから今風に咀嚼して、人気が出るような形にデザインしました。逆に、たんたん坊や二口女は原作に近くしました。その話の作画監督は、第1期のアニメから関わっている清山滋崇さんですし。

永：第3期第1話が妖怪城の話なのですが、それも清山さんが原画で関わっていたんです。それから30年の時を経て、第6期でも妖怪城の話を担当していただきました。

清：第6期は、若い世代だけで作っているわけではないんですよ。僕らのような30代の若い世代から、昔の『鬼太郎』を制作していた50代～70代の方まで参加しているんです。新しいものと古いものが融合して、ここでもバランスが取れている。スタッフィングの運が良かった。

永：運と、『鬼太郎』の魅力もありますよね。「『鬼太郎』だったら関わりたい」と言ってくれるのはすごいことです。



イケメンの目玉おやじにびっくり！

——妖怪のデザインに、水木プロからのチェックは入りますか？

永：チェックは無いです、信頼していただいています。でも目玉おやじをイケメンにしたときは、「そこまでするなら、先に教えてくださいよ～」とは言われました(笑)。

——第14話の「まくら返しと幻の夢」ですね。

永：何をしたら視聴者がびっくりするかを考えて、ああいった形になりました。

清：目玉おやじを大きくすると聞いたときは、僕もびっくりしましたよ！　でも夢の中の話だからと納得して、じゃあデザインをどうしようかと考えて挙がったのは、実写版映画『ゲゲゲの鬼太郎』のウエンツ瑛士さんです。

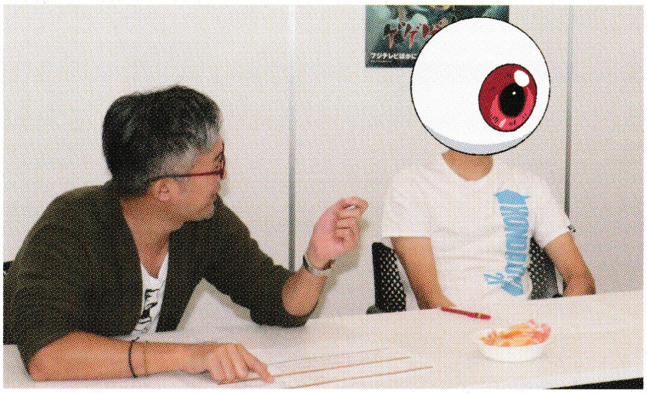
永：衣装は初期のデザインから変更しましたよね？

清：そうですね。最初は実写版にそのまま寄せたので……短パンを履いていました(笑)。外見が30代から40代と言われていたので、流石にその歳で短パンは無いだろうという話になり、和装に落ち着いたんです。次は誰をイケメンにするの？

永：ぬりかべかなぁ(笑)。
小：あまりやりすぎると、視聴者の方が妄想する隙が無くなっちゃうから。
清：小川監督は、こういうことを考えてるんですよ！
小：オタクなので(笑)。

犬山まなは菅田将暉!?

――デザインに苦労したキャラクターはいますか？
永：“犬山まな”を表現するまでは大変でした。オリジナルキャラなので、みんなが想像する犬山まながバラバラで、それぞれの立場で色んなことを言うんです。「テレビ的には」、「演出の意見は」、「アニメーターとしては」とか、色々な思いが重なってくる。みんなガンガン言い合ってましたね(笑)。
――どうやって今のデザインに落ち着いたのですか？
清：取材で屋久島に行ったんです。その最終日に、小川監督がホテルのテレビに出ていた菅田将暉さんを写真に撮っていて……。
小：犬山まなという名前は決まっていましたから、犬っぽさがデザインにどう合致するのか悩んでいたんです。でも、菅田将暉さんが後ろ髪を縛っている姿が犬のしっぽのような感じで良かった。
清：それを少しアレンジして、今の形になったらスパッと決まりました。屋久島に行くまで決まらないのはわかっていたんですよ。というのも……僕、霊感がありまして、絵の師匠は居ないけど、そういう方面の師匠は居るんですよ。その師匠は先読みができるんですが、まなの出来上がりについて、「屋久島に行った後に決まるぞ」と言っていたんです。だから写真を撮っている監督を見て、「ああ、これか」と思いましたね。
永：ゲゲゲの森のイメージとして屋久島に取材に行った訳ですが、導かれるべくして導かれてる感じがしますね。1つの点に向かって収束していってる感じが面白いですね。



「怖い」感覚が分からない

――全体のデザインをする上で、気を付けている点はなんですか？
清：子供がターゲット層ではありますが、妖怪や幽霊が出てくるアニメは怖い映像作りが醍醐味ですよね。だから影の付け方に気を使っています。あとは目。人は大抵目を見るので、そこに力を注いでいましたね。……とは言え、やはり僕は感覚で仕事をしているので、深く考えずにその時ごとの感覚で描いています。
――確かに、第1話を見た時に「怖い」印象を受けました
清：先程言ったように僕は霊感があるので、そこら辺じゅうに幽霊が見えているんです。だから“怖い”という感覚が分からないんですよ(笑)。
永：取材で屋久島に行った時にも、「今、窓のところ通りましたよ」なんて言うんですよ！　怖いですよ！　僕は寝られなくなっちゃいます(笑)。
清：僕は幽霊が見えている分、人がどういう風に怖がるかという観点でしか恐怖を描けないんです。僕の発言で怖いと思ってくれる人たちの反応を見て、描写に生かしてます。

ずんべら霊形手術

――そうして作られたキャラクターの中で、お気に入りのキャラクターは居ますか？



清水空翔 オーディション時イラスト

清：どのキャラクターも自分にとっては等しく扱っているので難しいですね。強いて言えば……犬派か猫派かと言えば猫派なので、すねこすりは力を入れたかもしれません。

永：僕はずんべらが好きでした。ずんべらに会いたい……！

清：実際に居ますよ、ずんべらのモデルは壇蜜さんですから。

永：ああ、そうなんだ！　僕、壇蜜さんが好きだから、それでずんべらも好きなんだ。

小：僕は……全部にパワーを注ぎすぎていて、選べないですね。

永：そんな事を言ったら、ずんべらを挙げた僕がアホみたいじゃないですか(笑)。

小：1つに絞るなら、僕もすねこすりが1番好きかな。

清：あ、小川監督はきららちゃんが好きじゃないの？

小：(笑)。

――第15話「ずんべら霊形手術」に登場したきららちゃんですね

永：あのお話は『鬼太郎』が原作ではなく、水木しげる先生の短編が原作なんですよ。「良かった良かった」では終わらせないぞという話。世の中はそんなに単純じゃないから。

小：ダビングの時、ラストの音楽の付け方が最後まで決まりませんでした。永富さんが、「とにかく怖くやってほしい、狂気で終わらせてくれ」という一方で、演出さんは解釈に選択の余地が欲しいという要望でした。きららがイケメンを裏切ったことに対して、憤りを覚える人もいれば、「よくやった」と思う人もいますよね。観る人によって違う聞こえ方をする音を作らなければいけないので、試行錯誤しました。ダビングに関しては一番時間がかかった話です。

永：良いものを作るためなら、先輩とかベテランとか若造とか関係ないから(笑)！

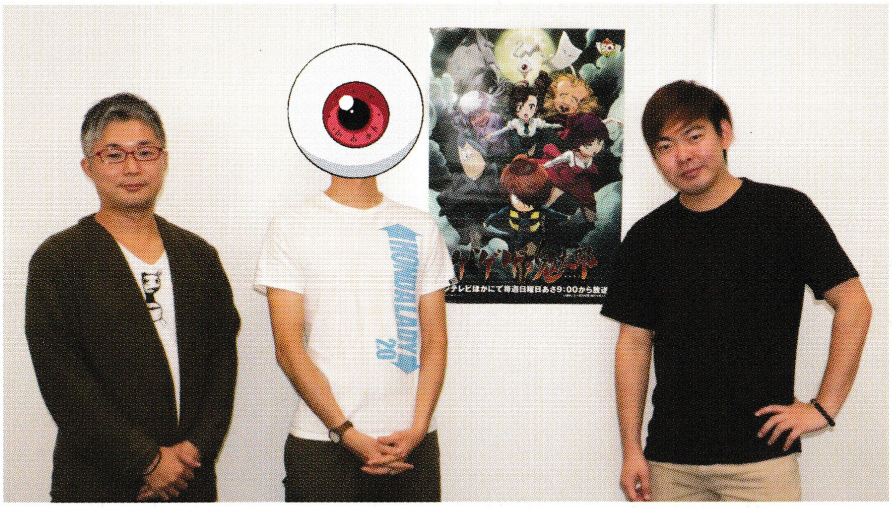
清：立場はあるけど、『鬼太郎』のスタッフという感覚で制作するので、役職についてはあまり気にしないでやっていますよね。

――最後に、BOX2を購入したみなさんにメッセージをお願いします！

永：起承転結で言えば、第1クールが「起」、第2クールは「承」です。第1クールには入れなかった色々な仕掛けを入れたのが第2クールです。BOXでまとめて、第1クールから何を変えていったのかということを観ていただきたいです。

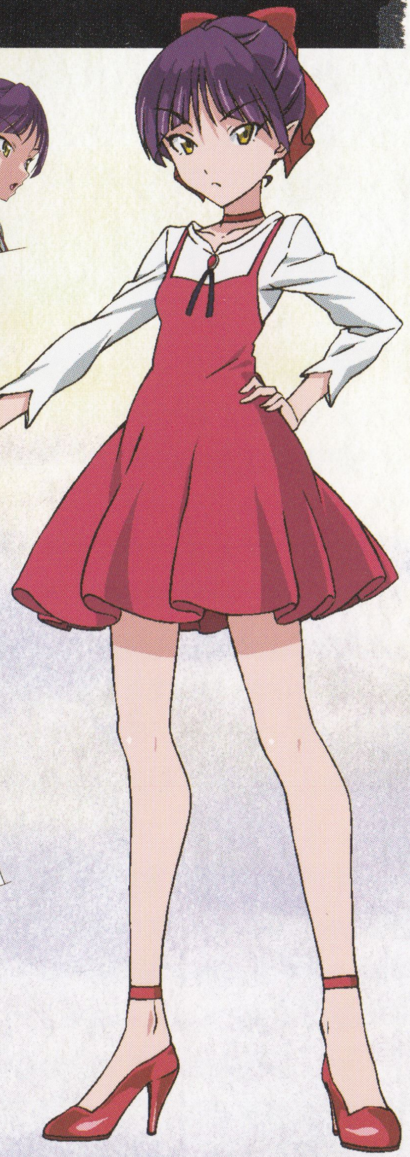
小：第1クールは、初回ということで濃い話が多かったんですよね。第2クールでは、その濃さを維持しようと苦労して制作していたんですが……、振り返ると第1クールよりも濃い話が揃ったと思います。特に第23話の「妖怪アパート秘話」は原案から考えさせていただいたので、個人的に思い入れがありますね。泣き、笑い、境港とのコラボ企画など、濃い話が揃いましたので、観返して楽しんでいただけるとありがたいです。

清：ビジュアルを見ただけで第6期のものだと分かっていただくために、BOXのデザインに関しても影の形や色味に気を使っています。例えばアウターケースの鬼太郎とねずみ男は、影の部分を黒くしたカッコイイ表現を採用しています。そんな“スタイリッシュ”がコンセプトの、第6期らしいデザインに注目していただきたいです。



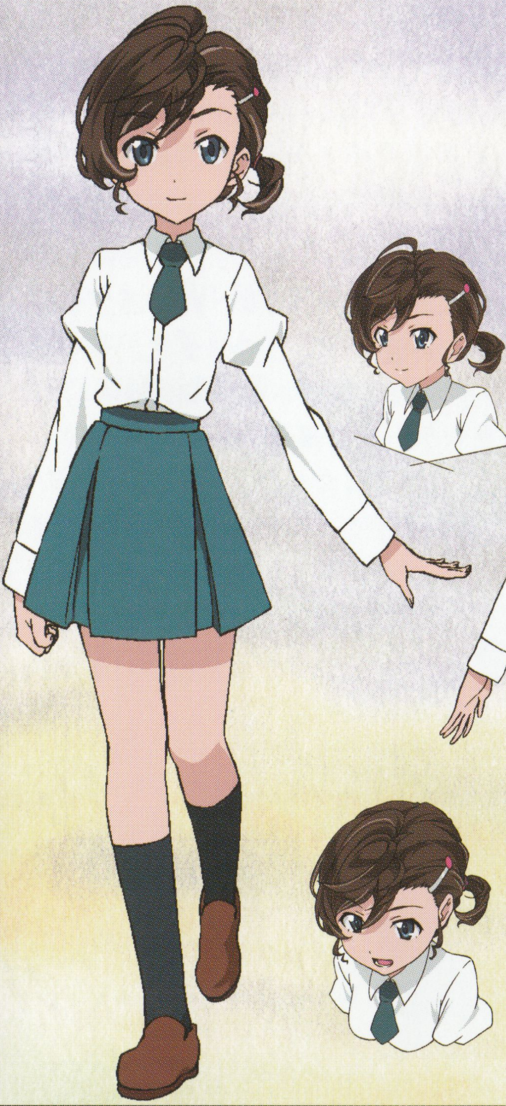
キャラクター紹介

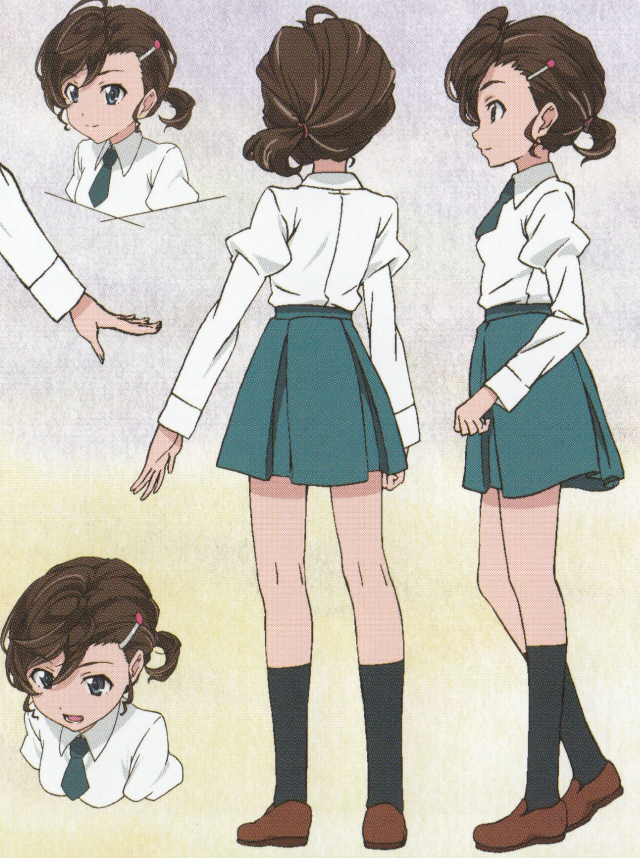


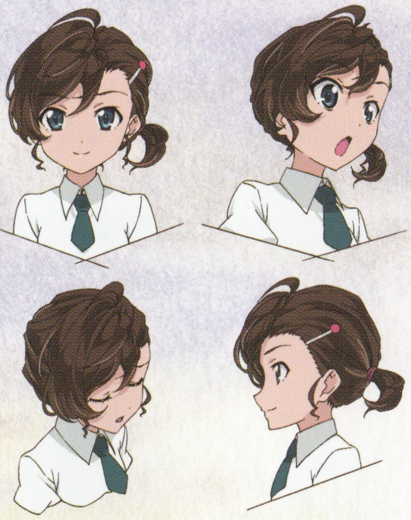


ねこ娘

鬼太郎の仲間である猫の妖怪。きれいな外見からは想像できないほどの高い戦闘能力を秘めている。お金に汚いねずみ男が悪さをすると目の色を変えて豹変し襲いかかる。普段は誰に対してもツンとクールに振舞っている。





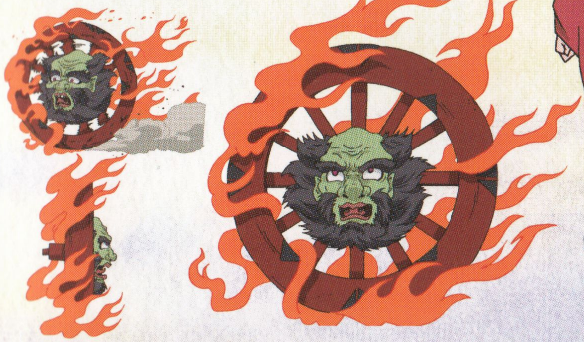


犬山まな

中学校一年生の女の子。
人一倍好奇心が強く、人間とは別の世界に暮らす鬼太郎達に魅かれていく。鬼太郎からはおせっかいに見られることもあるが、彼女のひらめきが解決の糸口になることも……。

#13 輪入道

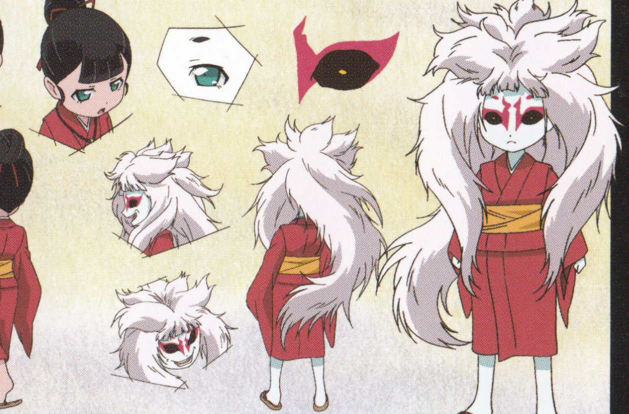
車輪の中央に顔があり、炎をまとった妖怪。口から出した炭素光線で、相手をダイヤモンドに変えることができる。人の魂が大好物だが、食べても食べても満足することがなく、常に飢えている。ねずみ男、ダイヤモンドシンジケートらと共謀し、宝石に目がくらんだ人々をダイヤモンドに変え、その魂を食らっていた。



#14 夢繰りの鈴の少女

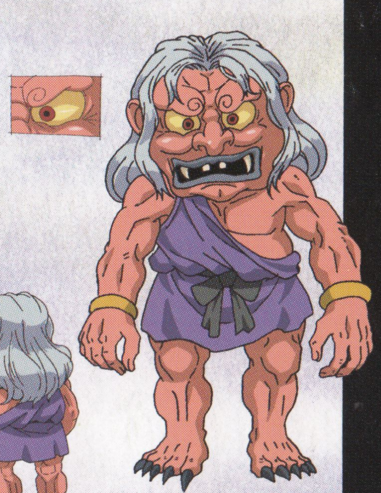


かつて洪水を鎮めるために川の神に捧げられた少女。夢繰りの鈴を使って、現実に疲れた大人たちを夢の世界に導き、永遠の遊び相手にしようとしていた。



#14 まくら返し

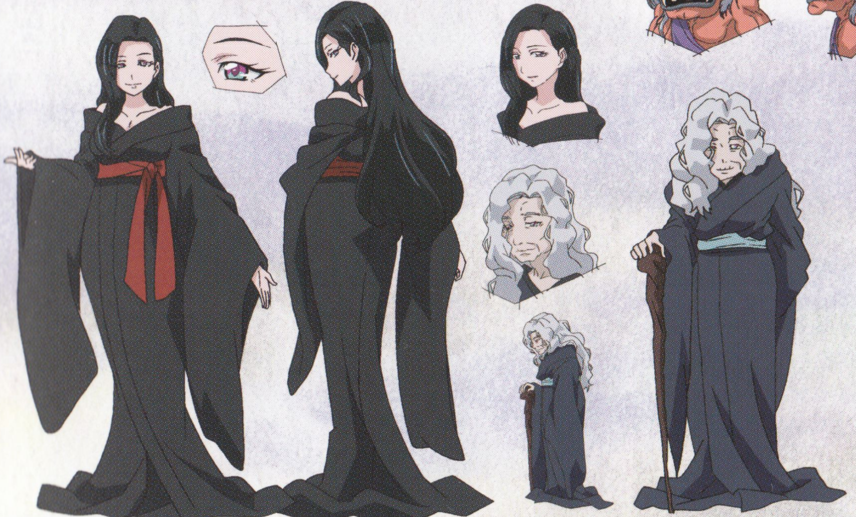
小さな鬼のような外見をした妖怪。寝ている最中に人々の枕を取り上げたり、足と頭の向きを移動させたりする。山の中に住み、夢にとても詳しい。本人曰く「妖怪の中で一番夢に詳しいのはこのオレ様だ！」とのこと。夢繰りの鈴を使って子どもを夢の世界にさらい、食べようとしていたという過去をもつ。





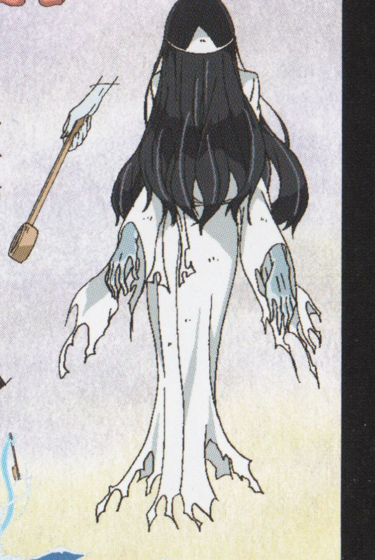
#15 ずんべら

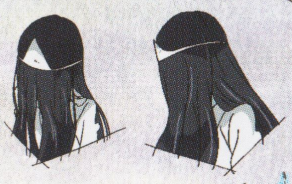
霊形手術を行う、老婆の妖怪。元は人間の女で、美しさを求めるあまり水銀を飲み、死んでしまったという。そのため、かつての自分と同じく、美しさを求めて狂う女たちを見るのが好き。見返りを求めずに美しくなりたいという女性の願望を霊形手術で叶えてくれる。霊形手術は死人の顔を張り付けるというもので、受ける人間は元の自分の顔を失うことを覚悟しなくてはならない。



#16 船幽霊

元は海座頭に魂を奪われた人々で、海の中から「ひしゃくくれ〜」という声とともに現れる。













#16 海座頭

琵琶法師の姿をした海の妖怪。琵琶を奏でることで海水を操り攻撃する。財宝に目が無く、財宝を積んだまま沈んだ船を引き上げる手下として、人々を襲い船幽霊にかえてしまった。

#17 小次郎

烏天狗の心優しい若者。長老の考えに背いて、まなたちの手助けをする。



#17 烏天狗長老

日本最古の霊峰・大山に千三百年の昔から棲んでいる烏天狗の長老。人間との関わりを嫌う。



#17 蟹坊主

戦国時代にとある一国の姫に仕え、家臣として人間たちと戦った。巨大なハサミをもち、口から出す泡で相手を銅像に変えることができる。人間の姿をしているときは雲水に扮したひげ面の大男。「両足八足、横行自在にして、眼は天を刺す。これ如何に？」という謎かけをし、答えを言えなかった人々を次々と銅像にしていった。 大山の烏天狗とは因縁がある。





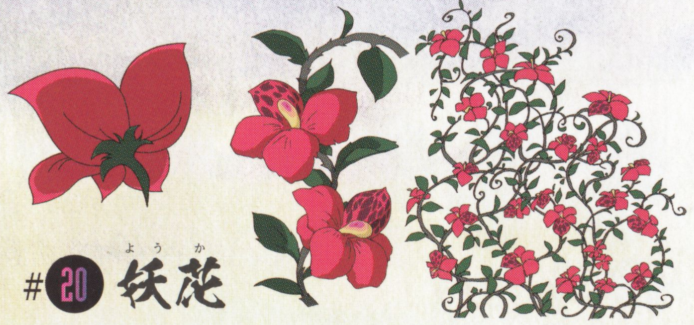
#18 かわうそ

オベベ沼のそばに住む妖怪。
人間に化けることができる。 山に住んでいる人々にウソをついて驚かしてからかっていたが、最近は人が住まなくなってしまい寂しく暮らしていた。 本当は優しい性格で、怪我をしたおばあさんを介抱してあげていた。

#20 トゥブアン

南の島に棲む古い精霊。
島で亡くなった日本兵の遺骸を守るため、戦争の音を使い伐採業者を脅していた。



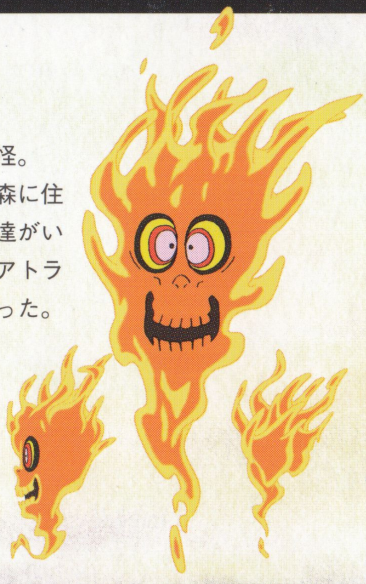


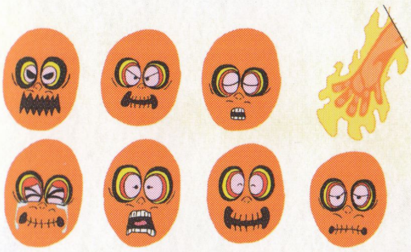
#20 妖花

毎年お盆の時期になると、まなの大叔母さんの家の屋根や壁面、庭を覆いつくすほど沢山咲く、真っ赤な花。かつて、大叔母に気持ちを伝えられずに南の島で戦争のために命を落とした青年の想いが、花になって届けられていた。

#21 たくろう火

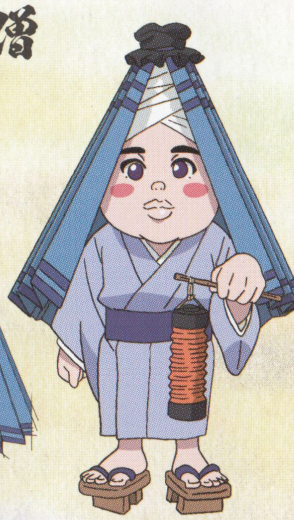
宙に浮いた炎に、目鼻と口がある火の妖怪。炎を自在に操ることができる。ゲゲゲの森に住んでいるが、他人と話すことが苦手で友達がいなかった。ねずみ男に誘われて遊園地のアトラクションで働き、雨降り小僧と友達になった。

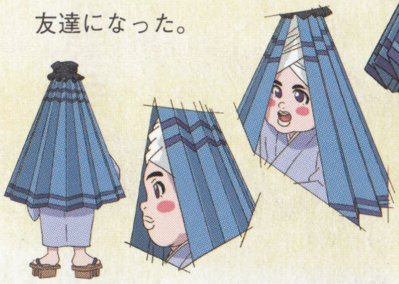




#21 雨降り小僧

自由に雨を降らせることができる妖怪。ロボットのピグの着ぐるみを着て働いていた遊園地で、たくろう火と出会い、友達になった。

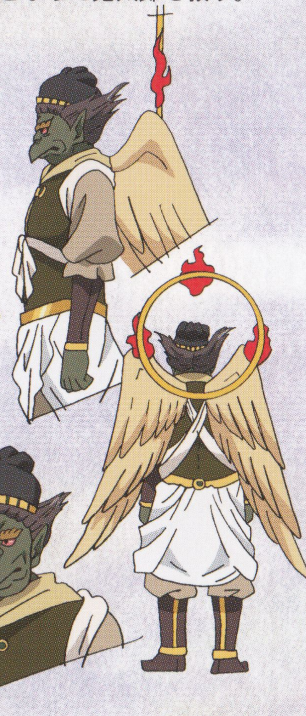




#22 カルラ

かつて牛鬼を封印した異境の神。千手観音を守った二十八武の一人で、島の鎮守の社に祀られている。島の人々の祈りによって再び現れ、牛鬼となった鬼太郎を救う。





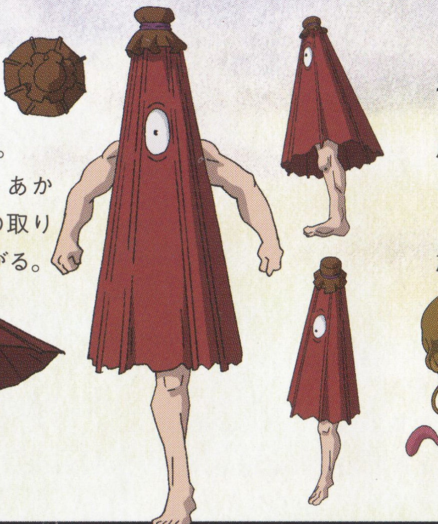


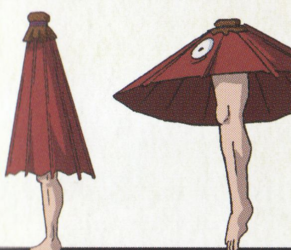
#22 牛鬼

とある島に伝わる伝説の妖怪。巨大な6本の脚と鋭い爪を持つ。その巨体は、家をいとも簡単に踏みつぶすことができる。正体は生きた気体で、一度は鬼太郎に倒されるも、鬼太郎に寄生することで再び牛鬼と化し、ねこ娘を窮地に追い込んだ。

#23 唐傘

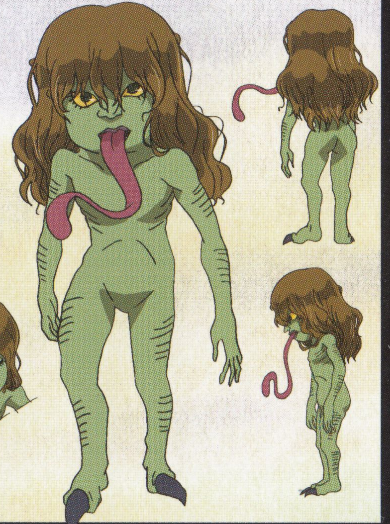
一つ目に一本足の傘の妖怪。大家のために、ろくろ首・あかなめと共に爽快アパートの取り潰しを阻止するべく立ち上がる。





#23 あかなめ

風呂場の垢を舐めとる妖怪。ろくろ首、唐傘同様に爽快アパートを気に入っており、大家の家族のことを大切に思っている。



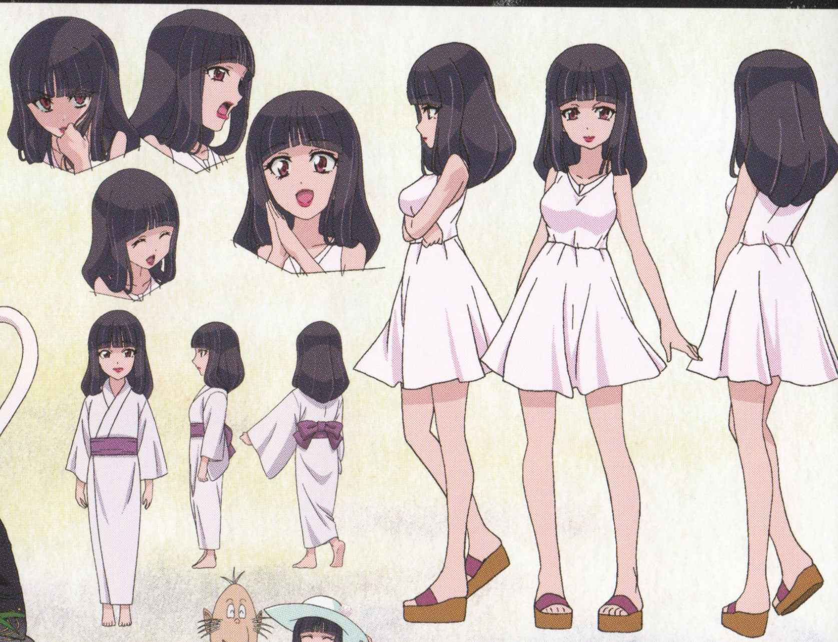


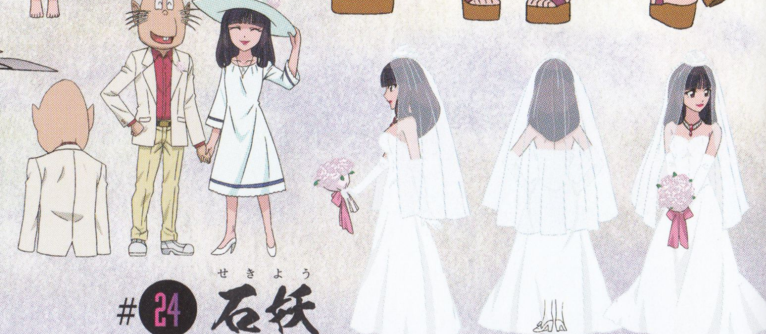
#23 ろくろ首

和服姿の女の妖怪。
首を長く伸ばすことができる。
あかなめ、唐傘と共に人間の世界にある爽快アパートの住人であり、常に行動を共にしている。









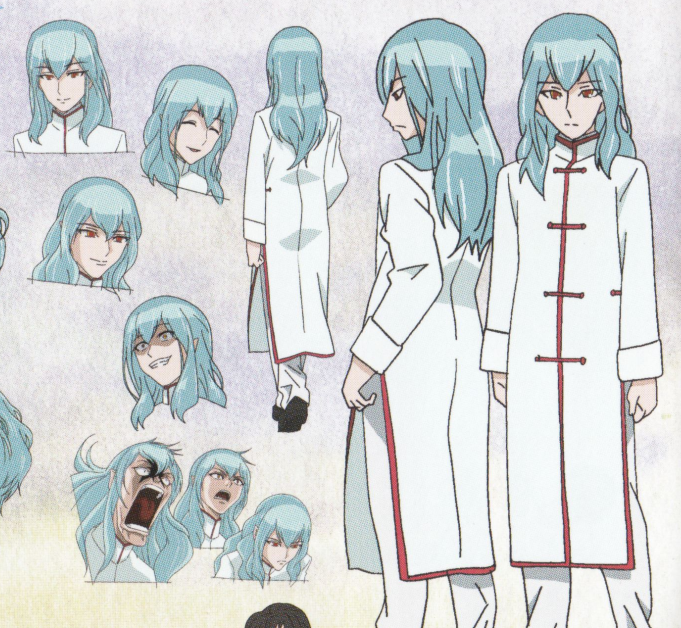
#24 海坊主

海に住む巨大な妖怪。
石妖の竜巻をものともせず、鬼太郎たちを助けた。



#24 石妖（せきよう）

石切り場に美しい女の姿で現れて、男をたぶらかす妖怪。石妖に按摩をされた者は眠ってしまい、背中には石で引っ掻かれたような痕が残る。 男たちから金をまきあげていたところねずみ男も被害に遭い、鬼太郎と対立。一度は砕かれるものの、石の破片を渦巻く竜巻になって反撃した。



#25 くびれ鬼

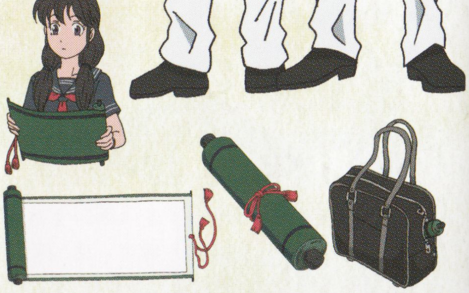
長く伸びた髪の毛と、巨大な頭をもつ妖怪。長い髪は首をくくるための縄にも、攻撃手段にもなる。その正体は一種の憑き物のような存在で、憑かれた人は首をくくって死んでしまう。



#26 画皮（がひ）

美しい青年が描かれた巻物の妖怪。
美しい外見はまやかしに過ぎず、正体は巨大な醜い頭部のみの妖怪。人間の魂が力の源で、不足すると体が透けてしまう。
厳しい母親に束縛された少女ゆうなを、優しい言葉と外見で虜にし、彼女を利用して人間の魂を食らっていた。





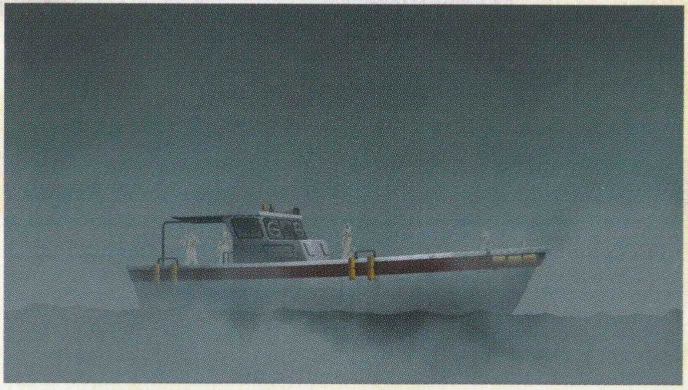
美術ボード













BIXA-9012／BIBA-9022

デザイン：バナナグローブスタジオ